

## 土に眠る (1)

# 土に眠る

佐々木涼子

### 〔1〕

「明日、アンドレのアンテールマンがあるんだけど、ユミちゃんはその女の子だから声をかけないってポールが言った」  
「イヌ君がそう言ったとき、ユミはショックで声も出なかった。アンドレが死んじゃった？ いつ？ どうして誰もそのことを言ってくれなかったの？」

アンテールマン。それが埋葬コンシエルジュのことだと知っていたのは、たまたま数週間前に寮の管理エルジュ人のマダムが外出から帰ってくるころに出会っていたからだ。全身黒づくめの服を着て、顔の前にも黒いヴェールを下げていた。玄関のホールにいたユミがびっくりした顔を見ると、

「アンテールマン。友だちが亡くなったの」

彼女はそう言って、身振り手振りでお吊いのまねをした。その時は、キリスト教だと日本の仏式とちよつとちがうかんだと思っただけだったのだけど。

あのアンドレが！ 思いもしないことだった。

ユミがはじめてアンドレに会ったのは今から二か月前。五月初めの土曜日に、ポーヌヘデギユスタシオンとやらをしに行ったときだった。おもしろそうだし、女の子が多いほうが楽しいからユミちゃんもおいでよ、とイヌ君が誘ってくれた。

## 土に眠る (1)

「デギユス、なに？」

ナオミは訊ねた。

「デ・ギユス・タ・シヨン。ワインの試飲のことだよ。ワインで、年によって出来不出来があるでしょ？ だから、今年のワインはどうかあって、試しに飲んで値踏みするわけ。で、もし去年の秋に仕込んだワインの出来がよければ、ビンに一九七四年で書かれて、いい値がつく。ほんとの上出来だったら、一財産さ」

「一九七四年で、いい年なの？」

自分をはじめてフランスに来た年のワインとなると、ちよっと興味がわく。

「知らないよ。オレ、高級ワインなんか関係ねえもん。ただね、知り合いに家がワイン作りやってるのがいて、友だち連れてきたら飲ませてやるって言うからさ。行こうよ」  
夕方というにはまだ少し間のある頃合いに、街のカフェ

に集合。そこから車を何台も連ねて夕暮れの田舎道をぶんぶん飛ばして行った。フランス人はなにしろ運転が乱暴だ。角を曲がる時だってぜんぜんスピードを落とさずに、すごい音たてて曲がるし、空いてる道だと赤信号なんか完全無視。もっとも田舎で信号待ちしても、どうせ誰も来やしないんだけど、でもちよっと怖かった。怖いぶん、気持ちよかった。

ポーヌの葡萄畑についたときは、まだ空に明るさが残っていた。門のところまでお父さんとお兄さんが迎えに出ていた。だいたい息子のお友だちだから、気持ちよく迎えてあげたいという家庭的な気持ちで伝わってくる。うっすらした寂しさの風がユミの心をなでた。

はじめのうちには、がやがやしてるメンバーのうちの誰の家なのか、わからなかった。親しい仲間らしいけれども、友だちの友だちというのも加わっているので、知らない人がいても誰も気にしない。ユミがイヌ君といっしょに来て、も、つぎつぎ自分の名前を言って握手するだけで、詳しい

## 土に眠る (1)

関係などことさら説明してくれなかった。そういうところは、フランス人はすごくあっさりしているというか、人慣れしている。

「こっちが白ワインの酒蔵」<sup>カーヴ</sup>

お兄さんが自慢そうに指さす方を見ると、地下へもぐるとンネルのような穴がぼっかり開いていた。そこを一行になつてしずしずと降りて行く。と、中が広くなって、幾つかの小部屋に分かれていた。そのなかの一つに入って、並んでいる樽から白ワインを飲んだ。長い柄の先に小さなカップのついている専用の柄杓でお兄さんがグラスに注いでくれる。お父さんがそれぞれのワインについて説明したけれど、ユミにはよくわからなかった。

階段を上って外に出ると、星が少し瞬きはじめていた。空にはまだ明るさが残っていて、透明な空気の中に燐光がちりばめられているみたいだった。

それから庭の反対側にあるもう一つの穴に降りた。赤ワインのカーヴ。お兄さんがきつきと同じように、柄の長い柄杓で、一杯づつすくっては、みんなに飲ませてくれる。一杯はほんの少しなのだけど、白ワインから考えるとかなりの量になって、みんなすごく陽気になってきた。一人がはしゃいで奇声を上げると、他の誰かが口笛を吹き、それから歌い出した。

「おいおい、カーヴで大声を出しちゃだめなんじゃない？」と、別の一人が言った。ワインがじっくり熟成できるよ  
うに、カーヴの空気はなるべく乱さないようにするのだから  
うだ。

「まあ、今日はいいさ。特別だ」

お父さんが寛大に言ったけど、でもみんなはそのあと、ことさら声をひそめて話をした。外に出ると、とつぷり暮れた夜空を星がうめつくしていた。これほどたくさんの星を見たのははじめてだった。空一面びっしり！ という感じだ。しかも日本の高原なんかとちがって近くに山がな

## 土に眠る (1)

いから、空の広いこと、広いこと！ 見渡すかぎりの夜空に無数の星が輝いているのをじーっと見ていると、怖くなるほどだった。

その星空の下で、みんなでさんざん歌った。誰かが一節歌い出すと、みんながそれに続く。歌いながら、げらげらお腹を抱えて笑う。でもナオミは歌詞がわからないので、ついていけない。きっと陽気な唄なのだろうけど、それにしてもなんて羽目はずした笑い方、バカ笑い。そう思って、顔だけにこにこしながら心の中で白けていたら、ひとり女の子の人が、

「シャンソン・パイヤルド。知ってる？」

と、ナオミに訊ねた。

「シャンソン・パイヤルド？ 知らない」

「でしようね。ちよつとエツチな唄のこと。男の子たち、大好きなのよ」

そう言って、ひとしきりけたたましく笑って、また唄をはじめた。好きなのは自分のほうじゃないの、とユミは思った。

その遠出で、はじめてアンドレに会ったのだった。笑い興じるみんなの中、ユミがとりのこされた気分でぼつんとしている、もう一人、みんなからちよつと離れたところ、黙って立っている男の人がいた。そしてユミと目が合うと、にこつと笑った。フランスへ来てはじめて見るような優しい笑顔だった。それがアンドレだった。

そのアンドレが死んだとイヌ君は言う。でもイヌ君の表情はあまり深刻には見えない。ノートル・ダム教会の前の小さな広場に面したカフェテラスに座って、誰か見知った人はいないかな、とキョロキョロしている。ここは大学から町の目抜き通りへ抜ける道筋なので、見まわすたい、誰か一人くらい顔見知りの学生がいて、彼に手を振る。彼もそれに応えて鷹揚に手を振り返す。イヌ君はほんとに

## 土に眠る (1)

知り合いが多いのだ。

どうしてそんなに知り合いが多いんですか、と商社マンの村山さんはイヌ君に生真面目な顔で訊ねていた。去年のノエル頃。文学部の地下のカフェが暖房と人混みでむんむんしていた。そのテーブルで、ユミと村山さんとイヌ君は顔を寄せ合って、おしゃべりをしていた。周囲の騒音に声がかき消されないように、村山さんが声を張り上げて言った。

「ドウシテ、ソナニーツ、シリアイガ、オオインデスカアツ」

去年の冬といえば、村山さんはまだディジョンに来て二か月と少ししかたっていない。この地方都市に社内留学の名目で滞在しているのも、日本のエリート会社員の律儀な立ち居ふる舞いを捨てることができず、会話のレッスンを習ったとおりに礼儀正しい挨拶などするものだから、どうも

フランス人の学生とは波長が合わない。誰かと知り合っても、こちらで自己紹介をしているあいだに、あるいはしようと思っっているいだに、相手のほうは次の話題に移ってしまう。で、別れ際はおたがいに何となくチグハグに終わってしまうらしい。フランス人の学生というのは実にとらえどころがありませぬ、村上さんはため息まじりに言うのである。そんな村上さんにとっては、イヌ君の交友関係の広さは驚異なのであった。まあ在仏三年目だから当然なのかもしれないが、それにしてもイヌ君の顔の広さは尋常ではない。

「ああ、みんな柔道の知り合いですよ」

村上さんの問いに、イヌ君はこともなげに応えた。

イヌ君は日本で柔道をやっていた。「ま、ほんの少々」と彼自身は言うが、しかしともかくも黒帯を締めるほどだ。ところがそのクロオビが、フランスではたいした威力を持つていたのである。

ディジョンに着いたはじめの頃、イヌ君はひどく退屈し

## 土に眠る (1)

た。もともとあまりマメなほうではなかったから、退屈の二文字は浮かばなかったが、なにせ、することがない。町の中心部は二時間ほど歩けばぜんぶ分かってしまいうくらい小さかったし、それでいて町はずれの新開地にある大学都市は広々としすぎている。日本の大学からは想像もできないくらいに広い敷地に大きな建物がポツン、ポツンと離ればなれに立っていたが、それぞれの建物がどういう性格のものか、外から見ただけでは一向に分からない。建物というのには、用がない人には外見じつにソツけないし、ちよつと入っていきにくい。しかも、その建物はどれも、人の出入りがほとんどないように見えたからおきらだった。

で、教室以外で行ってもいい場所となると、町中のカフェと学生食堂と、それからクルスという、日本の大学でいえば学生会館みたいな所だけだったので、毎日その三カ所をぐるぐると回っていた。

「いやあ、カフェだったって、知らない店は入りにくいもんだよお。薄暗いところで、腹のでっぷりしたフランス人のおじさんがカウンターに寄っかって、入ってくる人をじろろ見るんだもんねえ。オレなんか入っていいのかわからなくて、ひるんじゃうよお。だから毎日、プラス・ダルのグーラシエで時間つぶしてたの。あそこデイトンで一高いでしょ。カフェ一杯ニフランだから。町外れの小さい店なら一フランなのにあ。むだづかいしたもんだよなあ」

そんなある日、例のごとくクルスに立ち寄って、そこらじゅうに貼られている広告を一つ残らず丹念に見ていたら、「クラブ・ジュード」というのが眼に止まった。はじめは何のことかわからなかったが、下に小さく「日本の伝統的な武芸」と書いてあったので、ひよとして柔道かあ？　と思

った。

あくる日、さっそく行ってみた。なにしろ時間がありあまっていたから、わざわざ出かけたというよりは、いつもの三点コースの途中に張り出し付録をつけたという感じだ

## 土に眠る (1)

った。柔道着は日本から持ってきていたので、それを肩にかけ、でもほんとに柔道なのかどうか、正直言って半信半疑だった。

法学部前の十字路を門とは反対の方角に行った。それまで行ったことのない道だったが、場所は前の晩に地図で調べてある。用事があったって、目的があつてどこかへ行くのはあまりないことだったから、わくわくした。町並みに、ようやく色がついたみたいだった。

行ってみるとそこは、町の集会所のような建物だった。誰かに何か訊かれるかと思つたけど、そんなこともなく、難なく目的の部屋に着いてしまった。どうしてその部屋だと分かったかといえば、かなりの人数が集まつて、どたんばたんと柔道めいたことをしていたからだ。

誰にことわるでもなく部屋に入ったが、最初のうちは遠慮して、壁の脇に置かれたベンチに腰を下ろして、練習を

見ていた。

見れば柔道であることは確かだったが、しかしどこか奇妙でもあつた。だいいち、柔道着を着ているのが一人だけ。たぶん先生だろう。他はトレーニングウェアである。男と女がほぼ半々。それが入り乱れて組み合っている。かけ合う声もフランス語。いや、ときどき日本語の言葉らしいのが聞き取れるのだけど、発音がおかしいので、フランス語に聞こえてしまう。それよりも変なのは、組み合う前後の身振りや手振り。向かい合う時だって、派手に手を振り回してアピールしている。あれじゃあ動きの目的が絞れない。だいいち重心が高いんだよ。ほれ、見ろ。構えが出来てないからそうなるんだ。

イヌ君は見ているうちに、だんだんむずむずしていきした。しばらく忘れていた神経が体のなかで目覚めてくる。やりたくないな。そう思ったちようどそのとき、一人の男が彼のベンチにやってきて、空いている場所にドシン！と座った。たいして疲れたようすもないのに、おおげさに息をはずま

## 土に眠る (1)

せている。だらしが無いなあ。ちゃんとやらなきゃだめじゃないか。イヌ君は思わすそう思って、声をかけた。「やらなくていいのか？」

「ああ、いいんだよ。やるのも自由、やらないのも自由なのさ。やりたければやればいい。休みたければ休めばいい。すべては自由！」相手はそう言って、肩をすくめながら両腕を広げた。ダンスでもやってるみたいな格好だ。

「じゃ、ぼくもやってもいいのかな？」

「ああ、いいよ、いいよ。どうぞ、おやりなさい」  
ほんとかあ？とは思ったけれど、見まわしたところ誰ひとり自分より上手そうなのがいなくてなんか腕が鳴ってきだし、とりあえず着変えることにした。

イヌ君が柔道着に着替えて現れたときは、ちよつとしたセンセイシヨンだった。まずたった一人柔道着だった男が、彼を見つけて、

「オオ！ クロオビ！」と叫んだ。そういう彼自身は白帯だった。

それから彼の回りにみんなが集まってきた。先生と思われる白帯の男が寄ってきて、自己紹介をする。みんなははじめて目の当りにするクロオビに感嘆して、そつと手を伸ばしてさわる女の子もいた。それはまるで少年時代に読んだ熱血柔道マンガの一シーンみたいに感動的な情景だった。こんなに晴れがましい思いを味わうのは、イヌ君も生まれてはじめてだ。

先生のデルブーさんは、パリで日本人の先生から「ジュード」を習ったことがあるのだが、「トッテモ、マダ、ヘッタ―！」と日本語で言った。下手、と言いたいらしかった。「でも柔道に興味をもって、フランス人は大変多い。そして、少しでもいいから教えてほしいと頼まれました」  
つづきをフランス語でつけ加えた。

その日はそれから先生とイヌ君のデモンストレーションになった。それは大喝采とブラヴォーで終了した。イヌ君



## 土に眠る (1)

にとってもうれしいことだったが、みんなにとっても思いがけずすばらしいスペクタクルの一日となったようであった。

その日から、イヌ君はデイジョンで知る人ぞ知る（もちろん知らない人がほとんどだが）名士になったのである。くだんのジユド・グループの事実上の師範格となつて、かわいひ弟子たちに囲まれるという、夢のような毎日が始まつた。

イヌ君にとつて思いの外の幸せだったのは、グループのなかに多くの若い女性がいたことである。フランス女性にとつて柔道は護身術をかねたエクササイズで、とてもシツクな（！）趣味であるようだった。当時、つまり一九七二年の日本でも、柔道にたいする一般の認識は、まだそこまではないってはいなかつた。いくかどうかもわからなかつた。だからというわけでもないが、練習のほかには、ちよいちよ

い楽しいイベントがある。例のワインのドライブなんかもその一つだった。

（一行）

そういえば、ワインの試飲ドライブの日、ユミがアンドレとはじめて口をきいたのも、柔道のことだったたつけ。少し気分がほぐれてきたとき、まわりを見回してアンドレが言ったのだ、

「みんな陽気だね。ジユドやってる人たちだから」

そうなのか、だからイヌ君が誘つてくれたんだ。ユミはやつと気がついた。

「あなたも柔道をしているの？」

ユミが訊ねると、その人は、

「いや、ぼくはしない。でもフランスソワーズはやるよ」

「フランスソワーズ？」

「あの子」

そう言つて、さっきシャンソン・パイヤルドの説明をしてくれた女の人のほうを指さした。そして、両肘を張つて、

## 土に眠る (1)

ガニ股のポーズをして見せた。ほんの一瞬のことだったけど、その格好があまりコミックで表情豊かだったので、ユミは目を見張った。

そのとき誰かが遠くから彼に向かって、

「アンドレ！」

と呼んだ。ああ、アンドレっていうんだ、ユミはその名前を胸に刻み込んだ。

その時から、ユミはアンドレがちよっと好きになったみたいだった。ううん、好きって言っているかどうかわからない。でも、あんなふうに男の人と気持ちがかよい合ったような気がしたのは、久しぶりだった。もう二度と、そんな気持ちになることはないかと思っていたのに。もう人を好きになることなんかできないんじゃないかと思っていたのに。そして、あのダンス・パーティーがあった…。

イヌが町を行くと、あっちからもこっちからも声がかかってくる。それはあたかも、犬も歩けば棒に当たる、といったあんばいだ、と半田さんは言う。とは言っても、そのせいでイヌ君と呼ばれているわけではない。井上文男というのが正しい名前である。でもローマ字でINOUEと書くと、ふつうのフランス人は「イヌー」と発音する。で、ジユド仲間の一人が「ムッシュウ・イヌー」と呼びかけているのを、たまたま半田さんが耳にしまった。それ以来、彼は半田さんに「イヌ」と呼ばれることになり、そのまま愛称として広まり定着してしまったのである。

半田さんは外交官である。ここデイジョンには、毎年一人、外務省に入りたての外交官が海外研修の一年目として赴任することになっている。半田さんは、ほんとうはこんなフランスの片田舎に来てまで日本人とはつきあいたくないらしいのだが、なにしろ気がきく。それに、さすが語学の才能がある。それで、いつのまにか日本人グループのリーダー格になっていた。もったも、グループといったって、

## 土に眠る (1)

たかだか十人に満たない人数だから、新しい顔ぶれが発見されると、それだけで一大ニュースである。

「もう一人いたんだって、日本人！」と、ある日イヌ君がユミに言った。ノエルのすぐ後のことだ。それで年が明けた新年のパーティは、その人の歓迎会になった。

柔道をつうじてフランス人社会に入っていたイヌ君は、むしろ例外的に成功したケースだ。そして、その反対がユミたち、つまりユミとミヤちゃんのケース。

ミヤちゃんとユミは日本の大学に進学せず、その代わりにフランスに留学した。留学といってもフランスの大学の入学資格は持っていないので、大学がサイドビジネスとして開設している外国人向けのフランス語とフランス文化オープン・スクール、略してクール・エトランジェ（外国人講座）に籍を置いている。

ユミの場合は高校を卒業した年の夏に、日本の大学生向けの夏期語学研修に参加して、そのまま帰らずにフランスに残った。その研修旅行には、大学生のほかはコック志望の男の人や、ファッションの勉強に来たという中年の女性なんかもいて、その人たちには、研修が終わっても日本へは帰らず、それぞれの最終目的地へ向けて散らばった。

ミヤちゃんとは、その研修旅行で知り合ったのだった。語学研修を企画した事務所の人々が、もう一人フランスで私費留学をする予定の人がいますよ、と教えてくれていたのだけど、空港ではじめてその橋本美也子さんに会ったときは、気の合う友だちになれそうなのは、ぜんぜん見えなかった。なにしろ、ものすごく行動的なので、後からついていくだけでも大変なのだ。それに積極的で、人怖じしないから、いっしょにいて何かと恥ずかしい思いをする。それで、まずミヤちゃんがどーんと人に当たって、それなりに局面を打開し、あとからユミが、心の中でドウモスママ

## 土に眠る (1)

センと呟きながら、うつむいてついていく、それがお決まりのパターンになった。恥ずかしいことは恥ずかしいのだけれど、結局はユミもミヤちゃんの積極性のお陰をこうむるのだから、文句を言える義理ではない。ありがたいと思わなくてはいけない。

ミヤちゃんとのつきあいはフランス滞在が一年以上になった今でも、ユミの交友関係のなかではいちばん大きな部分だけども、ミヤちゃんが黒人のマドゥとつきあうになつて以来、ほかの日本人との折り合いがあまりよくないので、ユミとミヤちゃんはいわば差しのつきあいだった。差しつてよく言ったものだ。まったくもってユミには、これまでの人生で、これほどべったりと差し向かいで過ごした人はいなかった。考え方も行動パターンも、なにかからなまでに違うのに、二人はいつもいっしょだった。だから、一年目のあの心細さに耐えることができたんだと思う。

うん、でもあの感じを心細さと言っているのかどうか、それはわからない。なにしろ、ほんとうにつまらないことまで、どうしようもなく途方にくれていた。心細いなんて思っている余裕もないほど、どうしていいのかわからない。

持ってきた旅行用の石鹸がなくなつて買いに行つた。目抜き通りのデパートで、石鹸の売場を探したのだけれど、それが案外に見つからなくて、ミヤちゃんが体を洗うまねをしたら、店員がタオルの売場を教えてくれた。泡ブクブクのまねをしたら、ゴム風船に行き着いた。で、あつちに行き、こつちに回され、石鹸一つ買うのに午後いっぱいかかってしまった。一事が万事そんなふうだから、退屈しているひまもなかった。ただ、時々むしように悲しくなった。疲れていたのかもしれない。

今では、あの悲しさはなくなつた。日常生活にはほとんど不便を感じない。言いたいことは簡単なことばでたいいは通じるようになったし、後から来た日本人が勝手がわからなくてまごまごしてれば、何かと教えてあげること

## 土に眠る (1)

できる。するとみんな、そのときばかりは先輩を見るような目で、私たちを見てくれる。悪い気はしない。

でもそのあとで、みんな、君たちこんなところで何してるの、とたずねるのだ。どうして日本の大学へ行かなかったの？ それから、ああ、という感じで一人納得して、日本の大学へは行けなかったんだな、という顔をする。それからがよくない。落第生あつかいだ。まあ、当たらずと言えども遠からず、ではあるのだけれど。

日本で大学入試に落ちたわけではない。はなから受けなかったのだから、浪人でもない。ただ、どうしても受ける気になれなかっただけだ。もっと言えば、受けることができなかつた。それを説明しようとする、とても話がややこしくなりそうだし、気持ちが悪くがらってしまうので、いまさら親でもない他人に説明する気になんか、とてもなれやしない。だいいち、親にだって満足に説明しなかつた

んだし。だから黙って何でも思わせておくのだけれど、でもそれとは、つまり受験から逃げたというのとは、ちょっとちがうものがあるのだ。少なくとも、本人の気持ちとしては。

ユミが受験しないといったら、クラスの友だちは、勇気あるねーと言った。それはつまり、ああゆう眼で見られることをおそれない、という意味だったのだ。ということが、ここフランスへ来て、はじめてわかった。日本にいたときは、もっとたいへんなことがあって、そんなことまで考えなかつた。ほんとうは、気持ちの奥にもっと大きな何かがあった。でも、そのことは考えなくなかった。いまもまだ考えたくない。

身も心も腐ってしまっそう……。そうゆう感じを言ったときに、最初にわかってくれたのは、ふしぎなことに父さんだった。父さんだけはぜったいにわかってくれないかと思つてたし、そんなこと言ったら、ぶたれるんじゃないかともまで思つてたから、言い出せずにいた。でも、受験はいや

## 土に眠る (1)

だと言っても、フランスで自分に合ったことを見つけたんだと言っても、ぜったい納得してくれなかった父さんが、このままだったら自分が錆びて腐っちゃうようなんだよ、と言ったら、じーっとユミの眼をみて、そうか、と言った。いま振り返ると、その瞬間が決定的だった。

あのときの父さんの眼を、ユミはいまでも思い出すことがある。ユミの眼をひたっと見ていたけれど、でもあれはユミの心をのぞいていたのではない。父さんは自分の心のぞいていたのだ。父さんは、ときどきユミと自分をいっしょにしてしまうことがあったから。

うん、日本の大学へ行かなかったことは後悔していない。行ったって、あのままじゃたいしたものを得ることにはならなかつたらうし、あのすごい嫌なかんじから逃げられたのは、われながらうまくやったと思ってる。それは少しも後悔していないのだけれど、でもフランスで何を得たかと

なると、ちょっと考え込んでしまう。ただ日本から逃げ出したというだけではない何か…。